

「身体を動かすことから映像を動かすことへ イヴォンヌ・レイナーの変遷 1972-1975」

成城大学大学院文学研究科博士課程後期
ニューヨーク大学客員研究員

中島那奈子

ポスト・モダンダンスの旗手であり、ジャドソン教会派の一員であったイヴォンヌ・レイナーは、2002年の講演で以下のように話している。「ダンサーや振付家のキャリアを語ることは、直接的であれ間接的であれ、老いについて語ることである。それはグラフィック・アーティストや音楽家、写真家、作曲家、作家などが年齢と共に老いるのではなく成熟していくのとは対照的である。」この言及の背後には、伝統的舞踊技法からの解放を謳ったポスト・モダンダンスにあっても、老いた身体では不可能な技法の存在が暗示されており、レイナーにおけるパフォーマンスから映像へという作品の移り変わりとも呼応している。この発表では、レイナーの1972年から1975年にかけての二つの作品、グランドユニオンの名称でのパフォーマンス Continuous Project – Altered Dailyと、映像作品 Lives of Performers (A Melodrama) を取り上げ、「中立的な行為者」というレイナーの試みが、身体技法ではなく映像技術を通して初めて達成されていることを論証する。フェミニズムの視点からの従来の解釈に加え、身体技法と老いの問題に着目したレイナーにおけるポスト・モダンダンス再考を試みる。

1972年から1975年にかけて、レイナーは舞台での作品と平行して、映像による作品を作り始めていた。この芸術上の変遷は、身体における技法から映像による技術への、媒体の変遷としても説明できる。マルセル・モースは、身体技法を以下のように説明する。「身体技法 body techniques」とは、第一に、身体の動きが目的に叶うように自然化されていった、効率的な行為である。第二に、身体技法は、完全に目的が達成された時点で形が見えなくなるという意味で、行為遂行的と言える。そして、身体技法は、常に技法の原点となる身体に立ち返ることが必要である為、過去の価値を現在の形態の中に留めたものである。対照的に、「技術 technology」とは、身体から切り離され、与えられた知識と捉えられる。マーティン・ハイデッカーによると、技術とは真実を明らかにする方法であり、行為者が技術を道具として使いこなすことで生まれる自由な関係の中で、その目的が達成されると言う。技術とは、身体から切り離された知識が道具としての性質を帯びたものであり、身体から抽出され、貯蔵された知的エネルギーであると言う。従って、身体技法が技術へと変化する

ことは、行為者個人からその知を取り出し、それを行為者以外の者と共有していく過程と言える。

レイナーは、パフォーマンス Continuous Project – Altered Daily において見る者の空間の視点を切り替えることで、日常の捉え方を変容させようと試みた。しかしその結果、その場に居合わせた者全てが、レイナー自身の拡大された主体となり、行為者の側へと移行してしまった。ポスト・モダンダンスが掲げた伝統的舞踊技法からの解放という試みは、パフォーマーである行為者と見る者との垣根をなくしたが、その結果誰もが行為者となって見る者を失う事態に陥っていた。しかし、映像作品においては、見る者は誰でもパフォーマンスへの実際的な参加なしで、その場を共有することができる。ここで、パフォーマンスの空間は、見る者から隔たった所に、投影されている。映像の技術を用いることで、レイナーは初めて知識を行為者から切り離し、主体の客体性を見せる「中立的な行為者」という考えを現実化することに成功した。

グランドユニオンのリハーサル場面も含まれる映像作品 Lives of Performers (A Melodrama) において、レイナーは様々な振付的試みを行う。見る者の存在する空間とパフォーマンス空間とのフレームを切り替えることで現実を変容させる試みは、「ヴァルダによる独白」場面からも伺える。この場面では、身体を動かすたびにカメラのフレームから外れるパフォーマーのヴァルダと同様、向かい合っているカメラも自ら恣意的な動きを見せる。その結果、映像を見ている者は、どちらの側が動いたのか判断しかね、自分の見ている映像と自分の置かれている空間のずれによって、眩暈を覚えることになる。この場面でのカメラは、映像を見ている者の期待を裏切るように動き、ヴァルダのいる空間と、見る者の存在する空間との間に、擬似的な運動を生じさせる。ここでのダンスは、客体として動くヴァルダの身体技法に見られるのではなく、複数の移動する点における相対的な関係の中で現れてくる。この場面では、映像のヴァルダとカメラ、そして見る者の間に視差が生じることによって、見る者が、ダンスを感じ取っている。

イヴォンヌ・レイナーの芸術的変遷は、レイナー自身の身体が老いることと平行している。パフォーマンス Continuous Project- Altered Daily において試みられた、主体の客体性を見せる「中立的な行為者」というレイナーの考えは、もとの身体から技法が切り離され、映像技術を通して老いることない身体の映像へと変換される過程を経て、映像作品 Lives of Performers (A Melodrama) へと結晶化される。昨今の障害学の進展を踏まえて、従来のレイナー解釈では語られてこなかった舞踊における身体技法と老いの関係に着目する。